



二〇一三年九月三日、大槌まじりの城山虎舞「跳ね虎」

虎舞（大槌町郷土芸能祭）
 十一日は、大槌町の郷土芸能祭。例年この季節に開催されていた芸能祭が十三団体の参加で復活したのだ。その日は月命日で、若者が地元で踏ん張って取り組んでくれている芸能を観ようと仮設住宅から集まってきた方々に混ざって私も黙祷を捧げた。よそ者の体の私に「あんだっつから来た？」と気さくに話しかけてくれる、この被害甚大な地域の方々。その穏やかな瞳

その舞台は素晴らしかった。私も近くから集まっていた皆さんと一緒に座布団に座って、若い衆の激しく美しい舞いぶりにホーツと息を漏らし、拍手喝采し、味のある六〇代、七〇代の狂言の演技に腹の底からアツハハと笑う。沿岸の人達は、寒い冬に廻り神楽を観て、年に一度、心の蘇りをしていたんだなあと思う。この神楽を楽しんでいる時間だけは、震災前と変わらない。今だからこそ、変わらずこの芸能を行うことによつて皆さんに、このひと時以外の沢山の困難に負けない気持ち湧き上がってきたように。神楽衆が地域の人と交歓している姿を見て、観る側も演じる側にとつても、この場と時間が生きる原動力になれ、と願わずにはいられない。

幸い神楽衆の皆さんには人的被害はなかったが芸能を迎える場となる「宿」が数多く失われたそう。今、支援団体の皆さんは芸能の力を信じ、場を作ることに力を注いでいる。今回、私もそのおかげで本来はよそ者が入ることのできない神楽巡行を観ることができた。

「この場を与えてくださったありがとうございます。ありがとうございました。地元から離れた若い人が、帰りたいと思った時に戻って来れる町にしておきたいと思います。虎舞で頑張ってください。」また、「釜石に住んでるから虎舞をやっているんじゃない。虎舞をやる為に釜石に住んでいる」「十のうち、虎舞が九で仕事が一」という声も聞いた。佐渡にもそんな人達が何人もいるので、その気持ちがよく分かる。若者の心意気は、佐渡の集落の鬼

で、どんな地獄絵図を見たのだろうと思わずにはいられない。黙祷を捧げる脳裏には何が浮かんでいるのだろう。私はただただ心をからっぽにして、この土地の人から、芸能から何かを感じ取りたかった。

虎舞という芸能は実際に初めて観た。一般的な二人立ちの獅子舞の獅子が虎に転じたもので、釜石市・大槌町・山田町を中心に三陸沿岸に数多く伝承されている。虎は一日で千里行つて千里帰るといふ言い伝えから、船乗りや漁師が無事に帰港するようにとの祈りを込めたものとも言われる。浜の芸能らしく、太鼓と笛、手平鉦の囃子やかけ声は軽快でいて威勢が良く、虎達を生か生きと、存分に跳ねさせ舞わせている。演目は、虎の習性を表現するような『遊び虎』『跳ね虎』『笹喰み』など。最後は若衆達が虎頭を置き、低い姿勢を保ったままの、何ともいい『手踊り』で締めくくられた。主役の虎は十代後半の若者。子供にも手踊りの役があり、時に妙技を披露する太鼓や、笛、鉦は三〇代、四〇代くらいの構成だろう。

芸能祭の最後に、二人の青年が挨拶した。「この場を与えてくださったありがとうございます。ありがとうございました。地元から離れた若い人が、帰りたいと思った時に戻って来れる町にしておきたいと思います。虎舞で頑張ってください。」また、「釜石に住んでるから虎舞をやっているんじゃない。虎舞をやる為に釜石に住んでいる」「十のうち、虎舞が九で仕事が一」という声も聞いた。佐渡にもそんな人達が何人もいるので、その気持ちがよく分かる。若者の心意気は、佐渡の集落の鬼

太鼓と同じだなあと思う。無形民俗文化財の指定は無だけれど、無だからこそ、集落の生活に密着して芸能がコミュニティの結束となるのだ。担い手の若者は、芸能を通じて集落の子供から大人までに注ぐ気持ちを学ぶのだと思う。

この記事中の写真は、現地の芸能開催・取材記録に携わっていらした、東北文化財映像研究所長の阿部武司さんにお話を伺いました。素敵な写真のご提供に感謝いたします。

阿部武司さん◎プロフィール
 若手県に移り住んで三年、民俗芸能の映像記録に従事される。震災後は、若手の習俗・民俗芸能の雑誌「とら」編集長の飯坂真紀さんや、追手門学院大学の橋本裕之教授と共に、被災地の芸能状況を精力的に取材、復興に尽力されている。



～東日本大震災から二年～ 芸能、人々を突き動かす力

文・構成 ● 千田倫子
 Heartbeat Project Logo Design: Haruna Kino



震災後、被災集落の海に向かって神楽衆が自主的に行うようになった「神楽念仏」

一番寒い時期に東北の沿岸地域に行きたいと思っていた。とにかくその空気を自分の肌身で感じたいとの思いが募っていた時、復興の郷土芸能祭の情報を得て、二月九日から十二日にかけて岩手県を訪ねた。大槌町から陸前高田までの沿岸を車で走る。佐渡では感じたことのない、肌を突き刺すような寒さの中、陽光にきらめいたりアス式海岸の何と美しい景観だったことだろう（陸の津波の爪痕から目を転じれば）。人々の営みを受けとめ、抱き込んできたこの美しい海が、長い年月の中でほんの一瞬、牙を剥いてきたというのか。

黒森神楽（釜石巡行／鶴住居「宝来館」）

宮古市の黒森神社の権現様（獅子頭）を奉じて陸中沿岸集落を五穀豊穡・厄払いなどのために巡行して廻る神楽集団。各集落では、一般の民家が「宿」となり、権現様に二晩二日に亘り家に泊まっていた。ながら、集まった地域の人々と共に神楽を舞い、現在は正月明けに黒森神社を舞立ち、北廻り（宮古市／普代村）と南廻



「宝来館」での夜神楽。舞手が最初に覚える演目「権現のワシ」。見事な舞に観客から思わぬ声がかかる。

り（宮古市／大槌町）を二年交代で三ヶ月ほど巡行する。今回、私は「いわて民俗観光プロジェクト」が主催する釜石市鶴住居の「宝来館」という旅館を宿として、一般公開もされた巡行におじゃました。

まず、この神楽が沿岸各地の芸能巧者の集まりと聞いて驚いた。地域の芸能に携わる若者が、巡行してくる黒森神楽に憧れ、芸を磨き、その中から神楽衆に認められた者がメンバーになれるそう。月曜から金曜までそれぞれ仕事をし、土曜日は巡行地に集まって神楽を舞う冬の三ヶ月間。自分達の当然の務めであるかのように、十代後半から七〇代くらいの神楽衆が、こなれた振舞いで幕を張り、衣装をつけ、権現様をかかげて舞う。